

ピア・カウンセリングの視角

— 「自立生活」の理解のために —

A study on the peer counseling program
— for comprehension about Independent Living —

時 岡 新

Arata TOKIOKA

はじめに.

本稿は、障害者の自立生活について考える企ての一端である。かれらが地域ごとに「自立生活センター」を設立し、活動していることはよく知られている。以下ではセンターの開催する「ピア・カウンセリング」に照準し、参加体験を訊いてその特質をさぐるとともに、そこから垣間みえるかれらの日常生活のありようについても考察したい⁽¹⁾。

ピア peer とは、仲間、同等の者と訳される。ピア・カウンセリングとは、状況や立場を同じくし、何かを共有する者の間で行われるカウンセリングのことである。したがって、自立生活センターの開催する「ピア・カウンセリング」とは、「同じように障害を持った人達の間で行われるカウンセリング」をいう[立岩,1995:297][樋口, 1998:179-196]⁽²⁾。

筆者はセンターの一つに依頼し、Tさんの紹介をうけた。かれの生活史を訊いて筆者は大いに学び、自立生活やセンターの活動にいっそう強く関心をもった。なかでも「ピア・カウンセリング」は、センターの機関紙に読むだけでも魅力的であり、同時に謎めいていた。そこで、Tさんに請うて概略を教えてもらい、それを足がかりに以下で紹介する長時間のイ

ンタビューを行ったのである⁽³⁾。

Tさんは24時間介助を必要とする、全身性障害者である。念のための補足であるが、それはかれが一人になりえないことを意味しない。一人では何もできないのではなく、介助が必要になる事態は24時間、当然ながらいつでも起きうるという意味である。かれはセンターを運営する役員の一人でもあり、それにも由来して、さまざまな「ピア・カウンセリング」に参加してきた。なかには「ピア・カウンセラー」の養成を目的とした研修の場もある。Tさんに訊くのは、自立生活プログラム、ピア・カウンセリング集中講座、ピア・カウンセリング長期講座、ピア・カウンセラー養成講座、およびかれの住む地域の自立生活センターが行うピア・カウンセリングプログラムでの経験、である。『講座』の名があるものは、プログラムの理念やすすめ方を知り、学ぶ場である。とはいえ、いずれもデモンストレーション、セッションでピア・カウンセリングを“実体験”する。以下では、ピア・カウンセラー、グループ・リーダーとしての経験よりもむしろ、一般の参加者としてのそれを訊いていく。

ここからは、かれらの用語法にしたがひ、

「ピア・カウンセリング」を適宜、ピア・カンと略称しよう。

ごく手みじかに、ピア・カンのあらましを示す。セッションは二人あるいは複数人で行われ、ピア・カウンセラーとクライアントから成る。参加者どうし、握手するなどふれ合いながら自己紹介したり、からだを動かしながら心情を表明しあったりする。テーマを設定して互いに話し、聴きあう。ロールプレイ（経験の再現劇）をして話しあう、など。それらは、時間を対等に分け合う、傾聴するなど、いくつかの約束を前提とする。もちろん内容の詳細はそれぞれ異なり、またカウンセラーとクライアントの役割は必ずしも固定的でない（とくに『講座』のばあい）。Tさんの紹介によるだけでもピア・カウンセリングの含意はたいそう豊かであり、また時には“ピア・カウンセリングの方法を使って自立生活プログラムを行う”などの用語法もみられる。広義に言えば、ピア・カンとは、催しの名称であり、たがいに話し聴くときの技法であり、関係しあう際のルールである。けれど本稿では、一定の時間と場所で区切られた、複数人の、話し聴きあうセッション、いわば狭義のピア・カンに照準して考察をすすめたい。

各節の構成と表記上のことわりを付す。1節ではピア・カンにたいするTさんの概括的な評価を訊き、2節でその前提となる日常生活のありさまをみる。これらの中から、とくに障害者が自分の気持ちを口に出して言うことの困難に注目し、ピア・カンの経験に照らしながら、3節では言えない事由の詳細を、4節では言うことの意義を、それぞれ詳しく訊く。Tさんの述懐は4回のインタビュー記録から引用するが、その間にかれが自立生活センターの「所長セミナー」に参加したこともあり、回を重ねるほどピア・カンにかんする意見が整序されている。インタビューでは

類似の内容をくり返し訊いたが、各回の中心的話題と以下の各節とは、おおむね対応している。参考までに、インタビューからの引用箇所には、手許に印刷した記録にしたがい(回頁)と添え書きしておく。話された順の前後はこれで確認されたい。

1. “気もち悪いけど必要”

Tさんが自立生活をはじめて間もなくから今日まで、かれの参加したピア・カン全体について、印象に残っているプログラムやセッションはなにか、と訊いた。「〔前略、参加者がほかの参加者を“恨み辛み”のある者にみたてて〕枕で叩くとか。〔中略〕人をほめ合うとか、“はぐはぐ”するとか」(1. 1)。かれの応答は筆者に、いかにも手みじかで素っ気ない印象をあたえた。じっさいに、少なくともインタビューを続けたある時期まで、かれは必ずしもピア・カンに好意的ではなかった。

枕で叩くというセッションの意図はなにか、と訊いた。「感情を解放する〔のが目的〕とか〔いう説明を受けたことがあった〕」。「感情を出すことで、いつも自分が思っていることが、確固としないものが明確化するとか」(1. 1-2)。とはいえTさんは、自分は叩かなかったといい、感情を出してなにか言うように促されても「あんま思いつかなかった」ので「適当にや」ったのだという(1. 2)。

詳しくは以下で紹介するが、「ピア・カウンセリング」という方法、それが行われる“場”にはいくつかの約束ごとがあり、Tさんの参加するピア・カンもそれらを踏まえていた。筆者はTさんから教えられ、また資料などを読み⁽⁴⁾、ピア・カンの意図するところや方法に感嘆した。そうTさんに話した時のかれの反応。「ま、いいことなんじゃないですかね、たぶん。俺は気もち悪いとは思わけど」(2. 6)。ここで“気もち悪い”と約言さ

れる心情、プログラムのようすなども、のちに詳しくみる。筆者に興味ぶかく思われたのは、他方でかれが、ピア・カンを『必要だと思う』とくり返し言ったことである。筆者「〔それじゃあ〕ピア・カンみたいなプログラム自体は、やるのはよろしくない。みたいな感じ?」。Tさん「いやそれはない。だからそれは必要だと思うけど。俺がじゃあやるかっていうと、俺はやらないって感じですよ」(1.12)。

たとえば、Tさんも運営の中核を担う地域の自立生活センターでは、ピア・カンを不可欠のプログラムと位置づけ、実施している。これについてかれは、肯定的である。Tさんのように言う人は、ごく少ないのではないか。Tさん「〔確かに〕『ピア・カン、必要だとは思うんだよねえ、でもなんかイヤなんだよねえ』みたいな話って、どこにも書いていないですよ。〔中略、出版物など〕大きなところでは」。筆者「〔そんなふうに書いてある〕ピア・カンの解説書があったら、困るじゃん」。Tさん「まあね。ほかの〔自立生活センターの〕機関誌とか読んでもさ、〔中略〕なんかみんな『ピア・カンやってよかったです』みたいな感想がいっぱい出てるけど、ただ俺みたいに気持ち悪いと思ってる人が書いてた文章って、滅多に見ない。ま、俺は見たことない」(2.16)。

あるいは筆者の未熟が、Tさんの心情を的確に表現していないことを怖れる。かれはピア・カンというプログラムすべてに違和感をもっているわけではない。その目的については、むしろ積極的に評価している。筆者は視点をかえながら“気持ち悪さ”をいく度も訊いた。かれもいろいろに答えた。「ピア・カン受けたい人は、〔中略〕すごい希望を抱いているわけですよ、ピア・カンにたいして。夢が叶うみたいな」(2.16)。また、その場の

雰囲気になだれもが馴染む、「それがまた気持ち悪いよね」(3. 1)、とも。その一方で、ピア・カンの場合は『必要だと思う』ともいう。以下での議論を少しく先取りしていえば、それぞれのコメントは逆接的であるよりもむしろ、並列するものと解されるべきである。ピア・カンのプログラムはTさんの言う“必要”を果たすために工夫され、その結果、かれも違和感をおぼえる“場の雰囲気”が醸成されるとみるべきであろう。

ふたつのコメントのうち、『気持ち悪い』はTさんの感覚である。たいして『必要』は、ほかの参加者にとって必要であろうというTさんの判断である。いく度もピア・カンに参加して、ほかに感じたことはないだろうか。ピア・カンの主たるプログラムは互いに話し、聴くことである。積極的には話さなかったTさんも、いく度か聞き役を務めた。筆者「聴いて〔中略〕自分のなかに、考え方とかに、なにか変化とかあるわけ?」。Tさん「だいたい、まあ、効力はあった気がする。〔中略〕魔法にかかったような。いや魔法って言うてもしかたないな。なんていうかとりあえず、そういう境遇にある障害者っていうのが、一緒にほかの地域で生活してるんだ、とかさ。知れたことが心強かったな、って」。心強いとはどういうことか。「〔前略〕そういう〔自分たちが話すことを〕ちゃんと聴いてくれる人がいるんだ、っていうかさ。まあ僕は〔親身になって〕聴けなかったかもしれないけど、少なくとも違う人〔ピア・カンの参加者〕はちゃんと親身になって聴いてくれるわけで。とくにピア・カンの人〔ピア・カウンセラー〕はそういう存在としてそこにいるわけで。そういう人がいるんだっていうことは、心強かったですよ」(1. 7)。かれは別の機会に、それを“自信が持てる”とも表現した。筆者「〔『実際に自信が持てた』と言う

Tさんに、それは]何について?」。Tさん「それだよ。それはまあ、このままやっつけて、とかさ。または、あ、こういうやり方でやってもいいんだ、やっつけて、とか」(2. 5)。

Tさんが、自分でない誰かにとっての事であるように言う『必要』。それは、少なくとも『聴く』ことにかんして、かれ自身の実感をも踏まえているようにみえる。

先にわずかにふれた『講座』での体験を念頭に、“感情の解放”をしながら話す参加者を見たときの、Tさんの気持ちを訊いた。養護学校での出来事、役所の福祉課の人や、親とのことがイヤだったり辛かったと言う参加者の話を聞いたときについて(1. 3-5)。

筆者 「聞いている時のあなたは、どんな気持ちで聞いているの?」

Tさん 「まあ、それは、共感する部分もありつつ聞いてますよ。養護学校で辛かったって聞いて、そういうこともあったとか。」

〔中略〕

筆者 「そうやって話すことってというのが、話した人にとってどんな意味をもっていると思う?」

Tさん 「うーん、それはただ吐き出すだけ。ああ、さっき言ったように整理がつくっていう。自分が思っていることはどれくらいのものとか、それはあると思うし。逆に、〔話し手というよりむしろ〕それを言っちゃうことで周り〔の人たち〕に影響があるのかな。ここまで聞かしてくれてる、とかさ」。

周り〔の人たち〕とは聞いている人のことであり、Tさんもそれに含まれる。

Tさん 「ああ、そこまで〔言ってくれている〕、(間)、まあ聞いていること〔話されたことの意味、心情の深さなど〕は分かるわけじゃないですか。〔話し手が〕そこまで言ってくれてる、って。それは〔聴き手である自分が〕信頼してもらってるってことなのかなって。とか、またはうちらもここまで言っているのか、とか」。

筆者 「信頼されているって気持ちに僕にはまったく分からないんだけど、そういう気持ちになるもの?」

Tさん 「ま、この人がここまで言ってくれたんだったら、自分もそこまで言ってもいいのかな、とか。そんな感じ」。

筆者 「ちょっと斜に構えて言うけど、一応、約束事があるじゃん。それでやってるでしょ。そのあたりはどうなの?」

Tさん 「それは錯覚ですよ、きっと。でもそういうルールを設けることによって、そういう関係にはなれる。この人とはなれるってことが分かった、っていうのがあるんじゃないんですかね」。

筆者 「〔前略、ピア・カンの場では忠告、妨害をしない、秘密を守るなどの約束があるが、罰則があるわけではないし〕、秘密にするから話そうっていわれて、話せるものなのかな?」

Tさん 「そこは、話してくれる人がいるからじゃないですか。たとえば先にピア・カウンセリングの人〔ピア・カウンセラー〕が自分の思っている、自分の持っている傷とかを話

すと。話せば、この人がこんなに話してくれてるんなら、じゃあ私も信頼して話せるかなと思える、とか。〔Tさんでも、そう思う？〕
「うん、まあそうかな」。

Tさんに訊いて、ピア・カンの本質は、障害者どうし互いに話し聴くやりとり、それ自体のうちにあると了解された。また、かれのピア・カンにたいする“気もち悪いけど必要”の評は、ピア・カンと対照される日常生活のありように由来するようにも思われた。以下の各節では、話し聴くことで醸成される心情、かれらの日常について、いっそう詳しく訊こう。

2. 日々の生活

本稿が紹介するインタビューに備えて、あらかじめTさんからピア・カンにかんする教えを受けていた間にも、かれはピア・カンで“気もち悪いけど必要”といく度か言った。筆者はまさにその教えを受けながら、“ピア・カンは良いものだ”と感じた。そう言う筆者に、かれは『いいことなんじゃないですかね、たぶん。俺は気もち悪いとは思うけど』と応答したのである(2. 6)。

筆者 「気もち悪いと思うのは、なぜ？」

Tさん 「なんかその、みんな、なんでもかんでもさ、否定しないで聴きあうとかさ。信頼しあうとか。〔中略〕ここにいる人は信頼していい人なんだ、みたいに思っちゃったりなんかするのは、なんか気もち悪いな、って」。

Tさんは、また、“ピア・カンやればなんとかなる、と思う人たち”がいて、それが「なんでそう思えるの」か分からない、とも

言った。「なんか、過剰なものがありますね」(2. 16-17)。ここで過剰とは、ピア・カンにたいする参加者の期待、参加者どうしの信頼のほか、そこで求められる同調についてのものでもあろう。かれはピア・カンと違うどのような認識に照らし、そう感じるのか。気もち悪いとは何か、重ねて訊いた(2. 8)。

Tさん 「なんていうか、否定できないっていうか、さ。(間)、すべてを肯定して聞くっていうのは、なんかイヤなんだけど。もっとなんか、建設的、じゃないけど、意見交換してやっていく。いきたいと思ってたし。ま、そういう中で生活してきたわけじゃないですか。〔中略〕別になんていうか、ピア・カンみたいな世界で生活していたわけじゃなくて、ま、普通に。〔それにたいして〕すべて肯定されちゃって、認められちゃうっていうのが〔気もち悪いと思う〕」。

ひき続き訊いて分かるように、Tさんが“意見交換しながらやっていきたい”と思うのは、ごくありふれた日常生活である。敢えていうなら、全身性障害者としての、たとえば介助者たち、街の人たちとの、暮らしである。「僕はまだなんか古い人間なのかもしれないけど、どっちかっていうと話し合うってことが、重要だと思って。ま、話し合いたいと思ってしまふんですね」(2.13)。かれらの自立生活では、日々を過ごすなかで誰かと“意見交換”すべき場面がじつに多い。Tさんはそこで話し合いたいと思ひ、ある程度までは(後述)そのようにしてきた。けれど、誰もがTさんのようにできるわけではなく、それがかれに“ピア・カンの必要”を感じさ

せる。ピア・カンはなぜ必要か、と訊いた(2.12)。

Tさん「ま、必要な人がいるから必要、っていうのでも、6割ぐらい答えになってるかな、って思うんだけど。それだったらまあ僕とかね、積極的にピア・カンを開催する必要、ないじゃないですか。べつに僕は受けたいと思ってるわけじゃないんで。それでも僕は〔Tさんたちの運営する自立生活センターでピア・カンを〕やっぱり開かなきゃな、と思っているわけで。とりあえず何かな、ほかにいいもんがないから、っていうのがあるかもしれないですよ。ほかに何か、障害者の人が自信を持つとか、自立生活とか、自分のしたいことをしていくために力をつけていく方法みたいなのが、今のところほかにはない、みたいなのがあるので、必要。〔だからセンターでも〕やる。っていうのはあるかもしれないな。〔中略〕やっぱ聴く、話す、(間)、話す、聴いてもらうっていう場が必要なんでしょうね」。

ふたつの回答で引きあいに出されているのは、どちらも日々の生活である。Tさんが“ピア・カンの必要”をみとめる障害者たち、あるいはTさん自身の日日は、どのようなか。必要の言葉は、何らかの不足を示唆している。かれはそれを“ピア・カンの必要”に結びつけながらというよりもむしろ、ピア・カンのありようと対照させながら、筆者に紹介してくれた。筆者「日ごろ〔何かを〕話せないからピア・カンで話す、と考えると、日

ごろ話せないのはなにで、それはなぜなのか、と思う？」(1.6-7)。

Tさん「日ごろのなかで、共有してはもらえない、とか。(間)、まずその前提として、聴いてくれるっていう前提が、まず、ないですよ。聴いてくれない。ふつうの日常生活の中では。ピア・カンじゃないところには。最後まで言わしてくれない。またはその、思っていることを肯定してくれない。認めてくれない」。

かれの言い分は、ここまでは、筆者に分かりやすいものだった。それが抽象的な説明だからである。つづいて、やや了解の困難な具体例。

Tさん「たとえば、障害者の人が、携帯〔電話の操作〕を介助者の人にやってもらおうと〔する〕。で、なんていうか、携帯をうまく使えない人〔介助者〕とかがいるわけじゃないですか。俺は携帯なんて通話でできればいいけど、メールやるとか、写メールで写真撮るとか〔やってもらいたいときもある〕。〔そのような操作は〕なかなか分かんない人にとっては分かんないんだけど。それを障害者が〔介助者に〕頼んで、でもうまくやってもらえなかったら、なんかもう、すべてやる気がなくなっちゃう、みたいな。障害者の人が『こうやって』って言ったのに、やってくれなくて。ま、〔介助者には携帯電話の使い方も、障害者からの説明も〕分かんない

わけだから。そうすると全然やる気がなくなっちゃったりするんだけど、そういう気持ち、携帯やってもらえなかったことによってすべてを投げ〔出し〕たくなっちゃう気持ち、っていうのは、まずその、認めてもらうっていうことが、日常のなか〔では難しい〕。〔そのような気持ちを表明したとしても〕『誰々さん〔介助者〕は携帯なんのでできないんだよ、頼むなよ。そんなことは分かるでしょ』、みたいに〔言い返されてしまう〕。ってなことに最初〔から〕なっちゃうんですよ。そういうことですべてが嫌になっちゃう、っていうことを、理解しようっていう気もないし、理解できない』。

〔筆者「誰が？」 Tさん「健常者かな、障害者もかな…」、中略〕

Tさん「ま、なんか嫌になるだろうな、っていうのは、なんとなく分かる。そういうのは、障害者の人には分かる。おなじ経験をした人にとっては分かる、分かりやすかったりする。そういう気持ちっていうのを最後まで聴いてくれるっていうのが、ピア・カンの場。(間)、日常のなかでも出来ることだと思うんだけど、すごい限られている。時間とか。そういう〔ピア・カンのような、互いに話し聴くための〕ルールとか知ってなきゃ、まず出来ないし。というのはあると思うんですよ」。(5)

携帯電話の操作ができない介助者への不満。すべてが嫌になってしまうという気持ち。そ

れらは感じて当然のようにも、我儘のようにも、また大げさな物言いのようにも思われる。筆者自身このような愚痴を言うこともあり、その聞き手から同意を得ることも、一笑に付されることもある。いずれにせよ、ごくありふれた出来事のようにみえ、これのみから日日の生活で“話せない、聴いてもらえない”ありようを詳説するのは難しい。

上の具体例につづけて、Tさんがピア・カンでほかの障害者に話を聞いたときの気持ちを訊ねた。先にみたとおり、かれは『そういう境遇にある障害者っていうのが、一緒にほかの地域で生活しているんだ、とかさ、知れたことが心強かったな』と答えた。筆者「その、心強いと思うっていうのは、どうして？」(1. 7-8)。

Tさん「何かあったときには相談できるっていうか、話せるんだなって思える人がいる。〔中略〕それもあるし、別にほかの地域でも生活できる、〔ほかの障害者がほかの地域で〕ああいう風に生活してるんだったら此処でも生活できるようになるなあ、なるんだろうなあということも含めて。(間)、これはちょっと、僕自身の言葉として、まあ整理ができていくわけじゃないけど、否定の仕方。障害者の否定の仕方。障害をもっているっていうことの、僕自身はね、否定の仕方っていうのは、学んじゅうっていうか身につけちゃう、っていうのはあるね。日常生活のなかで。でも自分を肯定する仕方っていうのはさ、もちろん“ありのままに”とか本には書いてあるけどそれじゃああまり意味がない、言葉だけだったけど、

〔ピア・カンでは〕具体的に自分の肯定の仕方っていうのを知れるっていうことはある、あったかもしれない、あったような気がする。〔中略〕ほめ合い方とかさ、ほめられる、とか」。

筆者 「それは“自分を肯定する”っていうくらいに自覚できた？」

Tさん 「そういう風に言ったのは、俺は、今、これがはじめてなんだよね。その〔ピア・カンの〕場ではそういう風には考えてなかったけど、いま思えばそういう肯定の仕方っていうのを。(間)、否定の仕方っていうのは身につけちゃうけど、肯定の仕方っていうのは身につけてなかったけど、その場〔ピア・カン〕で何か見つけた、っていうか、ような気がする」。

Tさんの言う“自分の否定”も“自分の肯定”も、筆者には容易に理解しがたい。試みに先の『嫌になっちゃう』気もちについていえば、介助者に不満を感じたとして、それを“これは障害者である自分の我儘だ”と思う。あるいはまた、障害者である自分には、介助者にたいする不満を感じたり表明したりする道理はないと考える、などとなろうか。たいして肯定は、不満を感じたり、それを表明すること、であるかもしれない。

日日の生活では言えないがピア・カンの場では言えること、には他に何があるか、重ねて訊いた。Tさん「そうねえ、まあ、それは本当に些細なことだと思うんですよね」(2.1-3)。

Tさん「ま、たとえば『介助中に携帯〔電話〕すんな』とか、『〔介助中に〕

メールすんな』とか」。

筆者 「ごめんなさい、〔中略〕言えないのはなぜ？ だって〔障害者と介助者の関係は〕労使関係でしょ？ つまり…」

Tさん「まあ、その、労使関係、ね。なんだけどねえ。そこのへんが、なかなかその、ビシッと労使関係じゃ…。ううん、や、携帯してていい、逆に『携帯〔電話〕くらいやっててくれ』っていうくらいの時もあるわけですよ。ずっとそこに突っ立っててくれる、座っててくれるなら、雑誌とか読んでてくれよ、みたいなのところもあるし。逆に『いや、今はちょっとやめろよ』みたいなの。そのへん微妙なところもあると思うし。まあ、難しい。(間)、ま、そういうのを『やめてよ』なんて言うのはなかなか抵抗があるっていうか」。

〔中略、筆者「その時の気分、っていうのは？」〕

Tさん「まあ、『我慢』。(間)、『我慢』、じゃ、ちょっと足りないかな。ま、どっちかっていうと、まあ、『虐待』っていう言葉はちょっと大げさかもしれないけど、まあ、そんな感じかな。たんに『我慢』…。〔中略〕何ていうのかな、まあ、いじめられてるに近いっていう気分になるかな。〔中略〕我慢っていうよりは、まあ、どっちかっていうと『耐えてる』とか、そういう感じかもしれない。〔筆者「何に？」〕携帯〔電話〕いつ終わるのかな、とか。早く終わらないかな、みたいな。〔電話をやめると〕言うっ

ていうのは、やっぱり厳しい作業かなっていうのはありますね。どうしても、〔介助を〕やってもらってるっていうか、明らかにこの人が抜けたら困る、っていうのは、絶対に、いまのところあるんで。そこで問題起こしていき、〔介助者と〕やりあっていくっていうのが、そう簡単にはできないっていうか」。

やりあうとは、言うまでもなく、本節のはじめにみた“話し合う”作業である。かれは話し合えない。介助者に携帯電話をやめろと言えない。筆者「そういう自分について、あなたは どう思っているの？」

Tさん「まあ、べつに、こういう人もいるよな、って」。

筆者「じゃあ、その相手〔携帯電話をしている介助者〕には？」

Tさん「相手には？（間）、つねに、その、介助者が怖いっていうのはありますね。〔筆者の“むかつく”気もちはないかとの問いを受けて〕むかつく、っていうのはないかな。〔むかつくというより〕もっとなんか、ただ耐えてる」。

そこで言う『我慢』と『耐える』の違いは、なにか(3. 9)。

Tさん「〔前略〕介助の人に何か言って、介助の人がいなくなるっていうのは、〔そういう可能性は〕常にあると思うんだけど、その人がいなくなっても次の人に移るよってなれば、まあ、ある程度、余裕があるわけじゃないですか。そこで言わないっていうのは、

まだ『我慢』のうちだと思っんですよね。もうその人しかいないから、言えない…っていうのは、何ていうか、『耐えるしかない』」。(6)

いろいろの心情を、いろいろの事由から表明できない。それがTさんをふくむ、障害者たちの『ふつうの日常生活』のようである。ピア・カンについて“気もち悪いけど必要”というTさんは、かれ自身のそうした現況をどのように感じ、考えているのか。

3. 言わない、ということ

介助中に携帯電話で話す介助者に、『ただ耐えてる』というTさん。つづけて訊いた。筆者「“耐えてる自分”って、どう思う？」(2. 7)。

Tさん「どう思うか？（間）、耐えてる自分をどう思うかっていうよりも、耐えなきゃいけない状況をなんとかしてえな、っていうのはありますね」。

筆者「具体的に言うのと？」

Tさん「そりゃあ、介助者がすべて埋まるってこともあるだろうし、だから『携帯やめろ』って言える状況になる、とかさ」。

筆者「そうならない状況を、耐えている？」

Tさん「そう、だね。もちろん、耐えるだけじゃなくて、きちんとアプローチするところ〔ばあい〕もあると思うけど」。

ところもある、というよりむしろ、いろいろの仕方て介助者や周囲の人びとへの“アプローチ”をくり返すのがTさんたちの自立生活である。けれどここでは、それをしがたい状況に、とくに照準しよう。たとえば介助者

に言いたいことが言えない。筆者「〔ピア・カンで〕そういうことを話すとか聴くとかすると、〔たとえば〕耐えなくてもいいんだと思う〔ようになる〕の？ “耐える” っていうのが、どうなると思う？」(2. 7)。

Tさん「まずひとつは、『耐えなくてもいいんだ』って言われることだよ。『それは我慢しなくていいことだよ』って。ま、まずその前に、とりあえずそれを聴いてくれる、っていうのがあるよね」。〔筆者「聴いてくれる？」〕「絶対。それも、否定しない。で、さらに『それは言ってもいいことだよ』みたいなのが起きて。あるいは、さらにもっと具体的に『こういう風に言った方がいいよ』とかってことに繋がっていく。ピア・カンのばあい」。

いくつかに分節、整序してコメントをくわえる。『絶対』に『聴いてくれる』とは、発話と内容への対応である。聞き取りにくくても、時間がかかっても、言いたい、話したいかぎり聴く（時間の約束はあるが）。了解の容易でない、あるいは散漫な心情の吐露でも、話し手の表現したいように言い、話すのをゆるす。むろん確認のため聞き直すことはあろうが、たとえば“聞き手に分かりやすく話すべき”などの要請はない。これらは先にTさんの言った『最後まで言わしてくれない』日暮らしと対照的である。

話されたことを『否定しない』とは、ひとつに、言い分の是認を意味する。けれどいっそう心がけられるべき事は、たとえば電話をやめろと言えなかったTさんに言うべきだったなどと意見しないこと、である。これらは一方で、障害者が“自分を否定する”ありよ

うとは対照的であり、他方で、Tさんの言う“意見交換しながらやりあう”こととも対照的であるように思われる。

介助者の言動に“耐えている状況をなんとかする”ための方途のひとつは、たしかに、“我慢せず言うこと”である。とはいえ、聴き手が話し手にそれらの感想や助言を伝えるばあいには、必ず上にみたような過程を経なければならない。否、むしろそうしたやりとりを踏まえなければ、感想も助言も用をなさない。これが、Tさんの筆者に教えるピア・カンの基軸である。

以上を訊いてなお残る疑問のいくつかを、重ねて問うた。まず、Tさんの言うピア・カンの“気もち悪さ”について。筆者「あなたが〔ピア・カン〕は“変だ”と言っているところがその〔上で訊いた〕あたりだと思うんですが。やっぱり変なんですよ、否定しないとかっていうのは。〔ピア・カン〕はそんな変な状態にするの？」。Tさん「ま、必要だからじゃないですか」(2. 7)。ならば、話し、否定せず聴くことで、その必要はどのように満たされるというのか。

かれは前節で、ピア・カンの企図を『障害者の人が自信を持つとか、自立生活とか、自分のしたいことをしていくために力をつけていく』ことだと言った。その説明は筆者によく了解された。けれど“話したいように話し、それを聴く”過程でTさんの言う“自信”や“力”の生まれるさまはいまだ描出しがたい。そこで質問を工夫し、なぜピア・カンでなければならないのか、と訊くことにした。ほかのなにかと較べてピア・カンの特質を浮き彫りにしよう、と考えたのである。筆者「たとえば〔中略〕、『そんなの別に、ピア・カンじゃなくてもいいじゃん』〔と訊いたらどう答えるか〕。『ピア・カンじゃなくても、それ〔意見や助言などは〕できるじゃん』〔と訊い

たらどうか)」。Tさんはやや語気をつよめて答えたように、筆者は感じた(2. 7-9)。

Tさん「まずそう言われちゃったら、だから、そう言われちゃったら、じゃあもう、〔それは〕『ピア・カンじゃダメ』って言ってんじゃない、みたいな。〔筆者の〕『ピア・カンじゃなくてもできるじゃん』〔という質問は〕、(間)、こっちが『ピア・カンが必要だ』って言うてるのに、『ピア・カンじゃなくてもできるじゃん』って言っちゃってるじゃん、みたいな」。

筆者「うん、いや、だから、そこで僕はなんでわざと〔ピア・カンでなくてもできるだろうと〕言うかという、そこんところが聞きたいんですよ。『ピア・カンじゃなくてもいいじゃん』って言うと、(間)、あ、そういう意味か」。

Tさん「はい？ どういうこと？」

筆者「〔前略〕僕は、『ピア・カンじゃなくてもできるじゃん』って言ったときに〔Tさんから〕『いやいやピア・カンじゃなきゃだめだよ。それはこういう理由だから』っていうの〔返答〕を聞こうと思ったの。だけど、あなたはもっと大事なことを言っていて、『ピア・カンじゃなくてもいいじゃん』って言う〔訊く〕こと自体が、たとえば“否定”でしょ、っていうことだよな」。

Tさん「うん」。

〔中略〕

Tさん「そういうのは、毎日、障害者の人とつきあってる経験からそう思え

るだけ、だけど。とりあえず、聴く。否定しないで聴く。それが重要だっていうのがあるんですよね。〔中略〕ようするに、ちゃんと聴いてくれるっていうのが、やっぱりなんか、信頼関係を生んで。なんか、そこから自信がもてるとか安心していけるとかいうことに、繋がってるみたいなんで」。

筆者の質問を例にとり、Tさんは“否定”の実態を示した。それが障害者の“自信”と関連することも。けれど、かれは前節で言うとおりの、否定できないのは『なんかイヤ』だとも思っている。すなわち“気持ち悪いけど必要”なのである。

機会をあらためて訊いた。ピア・カンのように話すことは、なぜ必要なのか(3. 4-7)。Tさん「“話す場”がないから。聴いてくれる人がいないから。〔中略〕健常者の人、介助者の人にそれを言っても…、もちろん介助者の人でも聴いてくれるとは思うけど、まあやっぱり聴いてくれない人が多いかな。多いと思うし。ま、言っても…、やっぱり言った方はさ、こういうふうには聴いてもらいたい、っていうのがある訳じゃないですか」。しかし、そのように聴くのはピア・カンのルールである。設えられ、誘導されたものであっても構わないのか。「一応、ルールっていうのを作らないと成立しないんで、〔それで〕いいと思うんですけど」。かれは、約束の意義を次のように説明した。

そもそも、それはピア・カンに固有の特異な取り決めではない。いわばごく一般的な“会話の作法”である。とはいえ、ふだんの、とりわけ重度障害者の生活では、『とりあえず、まず“うん”と頷く』会話は稀少である。また「そういうの〔作法〕を気づかされる機

会ってというのは、ふつうに生活していたら、あんまりないのかなって。とりあえず俺はそれを知らなかったから。〔中略〕まず『うん、分かったよ』ってことを言わないと会話が成り立たない、っていうことを、最近まで知らなかった。かれ自身、『まず「うん」と頷く』ようには会話してこなかった、と。

たいしてピア・カンでは、頷きからはじめる会話を宗とし、それを「人間関係の再構築」と呼ぶ。「障害者の人って、そういう関係が無かったんじゃないですかね。無かったっていうか…、ま、基本的には聴いてもらえないっていう〔ように〕、みんなすごい思ってる。(間)、ま、みんなっていうのはひどいけど、まあ、聴いてもらえないって思ってる人、結構いるんですよ」。もちろん、Tさんにもそういう時がある。ふたつの場面を訊いた。

Tさん「それは、『空飛びてえ』、じゃないけどさ…」。かれはインタビューのはじめ頃から、言いたいと言わ(え)ない気もちの例として、それを挙げていた(1.9-10)。もし障害者が介助者に『立って歩きたい』と言ったとしたら、どうだろうか。

筆者 「〔前略〕かりに僕が言われたとしたら、答え〔に〕は困る、確かに。『え?』、ってことになる。〔中略、たほう〕ピア・カンではそれが言える？」

Tさん「うん。あと、そのへんはもう何て言うか、経験の差、なのかもしれないけど、そこで『あ、俺も立って歩きたいんだよなあ』とかって言う人も出ちゃったりする、っていうかさ」。

筆者 「出ちゃったりすると、どうなるの? 盛り上がるの?」

Tさん「まあ、言った方としては、うれし

いんじゃないですかね」。

〔中略〕

Tさん「たとえば『バイク乗りてえ』とか言ったとしてさ、僕がね。どういう反応されるか…。べつにそれはただ単にさ、『バイク乗りてえ』って言うだけで、さ。ほかの人〔とりわけ健常者〕が『空飛びてえ』って思っているっていうのと…; 例えば『バンジージャンプしてえ』…; 『アフリカ行きてえ』とかさ。その、行く行かない、できるできないとかって〔いうことに注目して〕、『いやあ、そんな〔こと〕できるわけないじゃん』みたいなことを言われてもなー。困っちゃうな、って。ほんとにやりたいと思った訳じゃない。ただ、やりたいと思っただけなんだけど、っていう…。そういうのはある、たくさんあると思う」。

筆者 「日ごろ、それを言おうという気にならない…?」

Tさん「ならない、ね。ならないね」。

かれらの胸のうちを想像できない。その具体例に『歩きたい』は端的である。しかし、これはむしろ我われが“聞いて困る”例ではないか。むろん、その反映として言わ(え)ないのではあろうが。困惑する筆者にTさんは、もうひとつ例を挙げた(3. 7-8)。

Tさん「〔前略〕介助者に『お茶淹れて』って言うじゃん。〔それにたいして〕介助者の人が『いや、ちょっと待って』って言うじゃん。『こっち〔別のこと〕やってるんでー』とかさ。〔そのようなとき介助者に〕

『いや、ちょっと待ってじゃなくて、〔それは〕止めて先にお茶淹れて』って〔言うことが出来ない〕。ていう話なわけなんだけど。そういうことを言うのは、大変なことなんですよ。『そんなん止めてお茶淹れる』、とかって。ま、言えないことはいっぱい…〔ありますよ〕」。

筆者には、前節の『介助中に携帯〔電話〕すんな』と言えないTさんが思い出された。かれは、なぜ言えないのか。そうして、自分の問いかけの的を射ていないさまを痛感するのは、もうしばらくの時間を要した。

4. 言う、ということ

筆者はTさんに訊いて、いく度も『なぜ』とくり返した。ピア・カンで話し、聴いた経験の深奥にせまる方途として、それは必ずしも十全ではなかった。そこで、わずかに照準をずらし、話しおえた後の心情に考察の手がかりをもとめた。ピア・カンやほかの機会に話したとき、Tさんは何を感じたか(4. 3)。

Tさん「〔前略〕ま、自分がどう思っているのかが分かったとか、または〔それを〕口に出せるってことが、分かった」。

筆者「そのときの感情って、どんな感じかな」。

Tさん「『びっくり』かな。『あ、こんなこと自分思ってたんだ。言えなかったことが『あ、言えたんだ』。自分は絶対これは言えないと思って、事とかが口に出るっていうのは、なんか『びっくり』」。

もうひとつ、かれは話して『安心する』とも言った。“安心”とは、何か(4. 1-3)。

Tさん「ひとつは、自分を肯定してくれる人がいるってことかな。『そういうの〔事、気もち〕もあるよねえ』みたいなことを言ってくれる人がいる、と」。

筆者「それを『安心』っていうのは、ちょっと、ちょっと大げさな気がするの、言い方として…」。

Tさん「障害者の人はみんな、(間)、少なくとも、僕が、(間)、やっぱりあえず、“否定されちゃってる”っていう感覚、っていうのは、あるかな、と思いますね。たとえば電車に乗る。で、まあ、なんか邪魔になってるんじゃないか、って。とか、介助してもらってるっていうのも、そうですよね。迷惑かけてるんじゃないか、って」。

筆者「〔それが“安心”になる過程は?〕」

Tさん「とりあえず、いてもいいんだよって、ま、ことだよね」。

筆者「『いてもいいんだよ』って、言われる?」

Tさん「〔僕が〕『自分はいない方がいいんじゃないかなと思うんですよ』って言ったら、〔中略、周りから〕『君がいた方がいいんだよ』って、言われる、だろうしね」。

もちろん、具体的にやりとりがなされたのではない。Tさんにとってピア・カンの場が、そのように感じられるということである。しかし、そこで『安心』の語を用いるのはなぜ

か。筆者「〔それは〕『うれしい』とは違う？『聴いてもらってうれしい』〔なら分かる〕。『聴いてもらって安心』って、あんまりふだん使う言葉じゃないから」。Tさん「『うれしい』の前だよ。だから、それこそ“蜘蛛の糸を掴む”じゃないけど。聴いてくれる人がいない訳ですからね」。〔中略〕「〔ほかに〕聴いてくれる人がいるなら〔ピア・カンで聴いてもらうことが〕『うれしい』〔と感じられる〕、とかさ。根ふかい人、いるよね。ほんとに聴いてもらえない人っていうのは、やっぱりいる…かなあ」(4. 5-6)。

かれの描き示す全体を、解釈のため話し手と聴き手に分けよう。両者は相互に作用する。話し手は聴き手にむかって言うが、聴き手がいなければ話し手の言葉は意味をなさない。やがて、話し手は言いたい心情を持たなくなる。こうして話し手は、話し手でなくなる。それをTさんは『根ふかい人』と表した。「根ふかいっていうのは、気もちが凝り固まっちゃってるってこと。〔中略〕気もちが出てこない。表面ばかりの部分が出てきて」。それはTさん自身でもある。「自分でも分かんないってこと。自分でも、どういう気もちがその中に閉ざされてるのか分かんない」。

むろん、誰もがそうと自覚するわけではない。Tさんは折にふれ出てくる『表面の部分』から推して、『自分が言えてない』状況を察するのだという。Tさん「〔たとえば〕介助の人が遅れて来て、〔その介助者にたいして〕『遅れてくん』って言えねえなあ、って〔思う〕」、など。それらの自覚を総じて、Tさんは教えた(4. 6-7)。

〔筆者「ほかに“言えていない”と認識している例は？」〕

Tさん「(間)、うーん、そうね。“障害者が〔には〕言えないことがあるん

だ”ってことを言う。とかさ」。

筆者 「どういうこと？」

Tさん「障害者の人が、介助の人に〔介助の仕方や障害者の心情などを〕説明するときには、障害者の人がね、なんでも思ってることを、すべて言ってるわけじゃなくて、すごい言えなくて、なんか一年とかつき合ってやっと出てくる〔言える〕ことがあるんだよ、みたいなこと」。〔筆者「ことを？」〕「ことを、言う」。〔筆者「誰に？」〕「介助者とかに」。〔筆者「ことが？」〕「ことが、言えない〔できない〕」。

いろいろの『言えないこと』を、たとえばピア・カンで言う。そこで感じるのは“安心”であり、“蜘蛛の糸を掴む”あるいは“藁をも掴む”おもいであるという。くわえて『絶対言わないと思ってたのに言っちゃってるとか、こんな気もちもあったのか』と気づくこともある。筆者「そうすると、自分の中ではなにが変わるものなの？」。Tさん「そのことと向き合える、ってことかな。〔それを〕どうやって言おうか、どうやって表明しようか、って」。とはいえTさんのぼあい、“話して気づく”経験はピア・カンにかぎらない。ピア・カンでない機会とピア・カンとの違いはあるか。

Tさん「〔前者では〕自分で完結しちゃうからね。ピア・カンの場合だったら、『僕もそう思ったんだよ』とかさ、共有できる人も現れてくる、みたいな。「日常の中では、そういうのに気づくチャンスって少ないと思うんですよね。ピア・カんだとちょっと機会が出てくるっ

ていうか。（間）、また、みんないるんで、みんなどういう風に対応してるか、考えてるか〔を知ることができる〕っていうのもある」。

気持ちを口に出して言う。びっくりする、安心する。そのような心情のあったことに気づく。肯定される、自信になる。筆者には、ひとつ分からない。ピア・カンで話すと、なぜ、自信が持てるのか(3. 14-15)。

筆者 「自分に自信が持てる、っていうのが、分かりにくいよね」。

Tさん「〔ふだんの生活でも〕『できるよできるよ』って〔言われたならば〕、調子にのってくるじゃないですか。それに近いと思います。チョロQにゼンマイを巻く、感じ。〔ゼンマイを巻いてやると〕チョロQ〔走って〕行くじゃないですか、ぶいいーって。あんな感じ」。「ピア・カンでゼンマイを巻いて。社会に戻って、ぴゅーんと使い切ったらまたピア・カンに戻って。そういうものに近いんじゃないですかね。その場では嘘でも勢いをつけてあげる。『大丈夫だ』って。〔中略〕ま、本当に、ピア・カンの人〔ピア・カウンセラー〕がどう思ってるか、それは分からんけど。『大丈夫』って…、いや、ピア・カンじゃなかったら絶対『大丈夫』って言わないぞ、みたいな〔こともありますからね〕。いや、こんなこと言ったら、本当のピア・カンの人に怒られちゃうのかもしれないけど。『本当に大丈夫だと私は思ってるから言ってるんだ』み

たいに〔諭されるかもしれない〕」。

上述の回答は、前節までのやりとりも踏まえて次のように解される。日日の暮らしでは湧くことさえ耐えていた心情。あらかじめ否定をふくみ込んでくり返される応答。ピア・カンではいずれの枷もなく、念いを生まれさせ、表明できる。しかも、それらは承認され、同意を得る。このとき話し手にもたれた快さの幾らかを、かれは“自信”と呼んでいる。

思い切って口に出した気持ちに、励ましや後押しの言葉をもらう。ほかにもTさんは、すでに紹介したように、だれかの経験や生き方を知って心強く感じるとも言った。かれらは聴くことでも“安心”の心情を覚えるのだろうか。Tさんの返答は、筆者に意外なものだった(4. 8-9)。

Tさん「そういうの〔安心〕もあるかもしれないけど、〔自分のばあいは〕聞くのはめっぼう辛い、かな。ま、話の内容によっては共感もできて、あぁ、この人こういう風に思ってたんだ、みたいなものもあるかもしれないけど、〔自分のばあひ〕聞くので安心するの〔こと〕は、ほとんど無いんじゃないですかね」。

筆者 「そこで“辛い”っていうのは、どういう意味？」

Tさん「“なんとかしなきゃ”，みたいな。この人の話を聞いて、なんとかしなきゃ、とか〔思うことが辛い〕」。

かれは地域の自立生活センターで、中心的なメンバーの一人である。辛いとは、なかまの苦悩を知って憤るという意味だろうか。

Tさん「“辛い”っすね。（間）、もうちょっ

と前だったら“怒る”っての〔気持ち〕もあったかもしれないけど、怒ってもどうにもならない、ってことが分かってくる訳で。〔しかも自分には〕怒りっぱなし、っていうのもできないからね。(間)、うーん、その辺は練習次第かもしれないけど、聞いて聞きっぱなし〔でいるの〕はやっぱ悪いなっていうところ〔役回り〕に僕はいるんで。〔そこで〕何かしなきゃな、ってことになっちゃうと、辛いな、って」。

本稿ではおもに、Tさんの参加した『講座』でのピア・カン体験を訊いてきたが、ここにかれは、地域の自立生活センターの開催するピア・カンについて話している。ピア・カンでは“聞きっぱなし”が約束である。けれど、かれはそれ以外の機会にも聞くことがあり、両者のあいだに確たる境界線を引き難いのかもかもしれない。筆者「“さしあたり聞いてくれればそれでいいの”みたいな話にはならないの?」。Tさん「聞いてくれただけで50%くらい解決した、みたいな結果になるのかもかもしれないけど、だけど本人にしてみれば100%解決したい、っていう積もりじゃないんですかね」。筆者はTさんの教えによって、“聞きっぱなし”であることにピア・カンの特長をみていた。それでこそ言う方も気楽に言える、と。

Tさん「そこはね、知ってる顔と知らない顔とで変わってくるかもしれないですよ。たとえば俺が違うところでピア・カン行っても、こいつ〔その参加者〕がぜったい解決してくれるわけ無いな、ってい

うのは分かるし。もう、とりあえず聞いてもらうだけでも安心、みたいな感じで、こっちも聞くだけみたいなことで済ませられるのかもしれないけど。身近な人の話ってことになると、やっぱり“その後”に繋がってきますからね」。

いくつかの経験、地域のピア・カンの実情から、かれは「だから逆にそこで、言いっぱなし・聞きっぱなしじゃなくて、お互いに言う・聞くっていう対等な関係があるかと思うんですよ」とも言った。そうした日々の実践については、本稿を経て、機をあらためて考察したい。

ピア・カンとそれ以外の場面がいわば“地続き”であることを、上でやや消極的に書いた。しかしTさんによれば、それは必ずしも否定されるべき事態ではない。ピア・カンの“約束事”について(4, 13-14)。

Tさん「それが、なんていうか、もう自立生活センターのなかのルールになっちゃってるんだよね、“ピア・カンのルール”じゃなくて。〔中略〕だから、話は最後まで聞く、と。聞かないと、おまえダメだよ、最後まで聞けよ、って怒られるわけですよ」。

筆者 「それはいいことだよな?」

Tさん「うん、そうだね。ま、障害者の人を支えるためにはそのルールで動かないといけないと思うし、〔それにもとづいて〕自立生活っていう活動をしていく、ってことが重要だと思います」。

また、それを介助者にも言う、とも。「自

立生活センターで、〔介助者にも〕『人の話は最後まで聞きましょう』と。『とりあえず、否定しないで聞きましょう』と〔指導する〕。

Tさんから訊いたかぎり、かれらの“言えない”事ごとは、少なからず介助者とのやりとりのうちにあった。けれど、ひとつ、達せられていることは、ピア・カン会場からの介助者の退出である。これ自体、障害者による明確な意思の表明であり、また介助者にたいする“否定せず最後まで聴け”の指導は、障害者どうし、たがいに意思表明をくり返し、積み重ねたことの果実でもある。

おわりに。

以上に紹介、吟味できなかったインタビューの内容もふくめ、本論につづけて考究すべき課題を記して、稿を閉じる。

第一は、4節末に触れたとおり、ピア・カンと日日の実践との連関である。ピア・カンへの参加によって変化した介助者との関係、ピア・カンへのつよい（ときには過剰な）期待、自立生活センターの活動との相互作用など。より多く、さまざまなピア・カン経験も訊き、議論を深めていきたい。

第二は、ひろく「カウンセリング」一般のなかに於いて、ピア・カウンセリングの特性を詳らかに示すことである。ごく簡単な一例に、定評ある概説書からいくつかを引き、ピア・カンと較べてみよう。

- ・カウンセリングでは『聴く』ことに努める。「相手に聴くことは、積極的関心と共感を伝えることになる。『聴く』とは〔中略〕『聞く』でも『尋く・訊く』でもない。『聞く』は音が耳に入ってくることであり、『尋く・訊く』は『尋(訊)問』という言葉に使われるように、こちらが知りたいことを尋ねるの意味である。『聴く』は、相手のわかってほしいこと

を理解しようとすることであり、相手の言いたいことの内容、言わんとしている問題点、その人独自のものの見方・考え方、気持ち・感情に、積極的に耳を傾けることである」。これを踏まえ、カウンセリングでは「相手の感じ方、相手のものの見方のままに相手の世界が見えるように聴いていく」のである〔平木,1997:48〕。

ここで説明される『聴く』姿勢のありようは、そのまま、ピア・カンで行われる『聴く』作業の理解に用いることができる。本稿でもこれらに拠り、「聞く、聴く、訊く」の語を使い分けた。

- ・カウンセリングは、日常生活の中で得られる関係とは異なった、独特の援助関係である。「カウンセリング関係の独特さは、カウンセリングがクライアントの自律を援助することを目的としていることからくる。ここで言う自律とは、自分の感情や、思考、行動に責任を持ち、自分で自分を支配し、自分のあり方を自己決定して、自発性を大切にすることである。つまり、カウンセラーは、クライアントが『自分で自分を助けることができるようになるよう助ける』のである。カウンセラーは、原則としてクライアントに代わって問題を解決してあげたり、クライアントが要求した問題の解決法をすぐに教えたりすることはない」〔平木,1997:68-69〕。

カウンセリングの目的とする『援助』も、ピア・カンの企図と一致しているように思われる。ただしピア・カンのばあい、たしかにピア・カウンセラーと参加者の両者はいるが、「ピア」の名が示すとおり参加者どうし話し、聴くのが（少なくとも理念的には）プログラムの中核である。またピア・カウンセラーも

ひとりの障害者として話し、聴く。『援助関係』のありようという観点から、一般のカウンセリングとピア・カンとを比較するべきであろう。

場面を構成する人びとの関係に注目すれば、カウンセリングで重視される『共感』についても詳細にみなければならぬ。

- ・「カウンセラーは相手の感じているように、考えているとおりに相手を理解し、相手以上でも以下でもなく相手の状態をありのままに受けとめようとする。そこには自分の感じや考え・価値観などを混じり込ませず、『あたかも相手と同じように』感じとり、考えてみるのである。それは、何かに対して相手と同じように感じ、考える同感や同情とは異なる。何かに対して相手が感じていることに、カウンセラーの心を向けることである。〔中略〕相手と全く同じ状態になってしまうと、例えば相手と一緒に楽しんだり、混乱したり、憤慨したりすることになるだろう。これは同感・同情であり、共感ではない。その点からすれば共感とは、同情してもらいたいクライアントにとっては物足りないかもしれない。逆に、日常生活では自分の身になって、自分と同じように理解してくれるような場面や人は少ないので、初めての経験に戸惑う人もいるかもしれない。ただ、共感が通じれば、自分が初めて理解されたという貴重な体験になることもある」〔平木,1997:45-46〕。

いまのところ、筆者は、ピア・カンの是とする理解の内実が、上でいう共感であるか、同感・同情であるかを判じる手がかりを持たない。一般のカウンセリングと異なり、ピア・カンのばあいは話し手も聴き手も、ともに障害者であるが、それぞれが自らの経験にもと

づき、一緒に笑ったり泣いたりしてはいけないのだろうか。詳しく訊いてみたい。

上記のうち、後二者では一般のカウンセリングとピア・カンとの相異を論じることになる。しかし、そもそもピア・カンは「カウンセリング」の語を用いているのだから、そこには実態として何らかの非対称な関係があり、あるいは望まれているとみるべきであろう。これについて筆者は、本稿のなかで『互いに話し聴く』ピア・カンのありようを、過度に強調していたかもしれない。ピア・カンにおける理念と実態の乖離についても、精察する必要があるだろう。

註

- (1) 障害者の「自立生活」については、それを実践する人びとの手によるものも含め、いくつもの紹介がある。それらはいずれも個性的であり、反面、少なからず類似した側面もみとめられる。何人もの論者に好んで参照され、言及される論集のひとつに『生の技法』がある。Tさんもまた一読者であり、筆者とのやりとりも、いくらかは本書にある指摘などを踏まえている〔安積・岡原・尾中・立岩,1990→1995〕。
- (2) このような特性から、ピア・カウンセリングでは聞き手をカウンセラー、話し手をクライアントと呼ぶことがある〔堤,1998:93〕。しかし他方で、以下でみるように「ピア・カウンセラー養成講座」なるものがあり、カウンセラーとしての認定を受ける者がいる。用語法が混乱しているように思われるのだが、本稿ではピア・カウンセラーの語を、おもに有資格者を指すばあいに用いる。役割、立場と資格にまたがって横断的に用いられる「カウンセラー」概念の整理については、他日を期す。
- (3) インタビューは2003年2月から3月にかけて行い、テープ録音により記録した。2月25日、3月4,12,19日をそれぞれ1~4と表記。
- (4) 本稿末尾「参考資料」を参照のこと。
- (5) 同じような言い回しは、障害者どうしに限らず、いろいろのセルフヘルプ・グループに参

加する人びとから頻繁に聞かれる。ピア・カウンセリングとセルフヘルプ・グループの異同を論じる作業は他書にゆずるが、それぞれの理解をふかめるために相互に参照するのは有意義であろう。たとえば石川・久保(編著) [1998] など。またセルフヘルプ・グループのプログラムについては高松 [2004]。

- (6) 介助者が慢性的に不足している状況、それにも起因して生ずる障害者の心情については、時岡 [2002] など。

文献

- 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也 1990→1995 『<増補改訂版>生の技法』, 藤原書店.
- 石川到覚・久保紘章(編著) 1998 『セルフヘルプ・グループ活動の実際—当事者・家族のインタビューから—』, 中央法規出版.
- 高松里 2004 『セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド—始め方・続け方・終わり方—』, 金剛出版.
- 立岩真也 1995 「自立生活センターの挑戦」[安積・岡原・尾中・立岩, 1990→1995:267-321].
- 堤愛子 1998 「ピア・カウンセリングって何?」『現代思想』26-2:92-99.
- 時岡新 2002 「介助者という他人について—ある『自立生活』の経験から—」『母子研究』22:54-72.
- 樋口恵子 1998 『エンジョイ自立生活』, 現代書館.
- 平木典子 1997 『カウンセリングとは何か』(朝日選書),朝日新聞社.

参考資料

- ・安積遊歩・野上温子(編) 1999 「ピア・カウンセリングという名の戦略」, 青英舎.
- ・全国自立生活センター協議会(発行)「ピア・カウンセリングってなあに?」, 1999.
- ・全国自立生活センター協議会・東京都自立生活センター協議会・ピア・カウンセリング委員会(編) 「自立生活プログラムマニュアル 入門編,実践編」, 1997, 2001.
- ・ピア・カウンセリング委員会(編) 「ピア・カウンセリング 集中講座テキスト 第7版」, 1993→2002.